



Vol.7 No.1
 発行人 井上 順孝
 編集人 齊藤 智朗
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

日本文化研究所 平成二十五年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開

井上 順孝

本プロジェクトは、平成二十五年度～二十七年度の三年計画で新たに発足したものであり、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(平成十九年度～二十一年度)と「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」(平成二十二年度～二十四年度)のプロジェクトを継承している。

事業内容は、従来と同じく研究開発推進機構全体が関わるデジタル・ミュージアム(DM)の運営、ならびに本プロジェクト独自の調査・研究の展開とそれに基づくデジタル・コンテンツの拡充という二つの柱からなる。それに加え、本年度からは、教育への還元という視点を重視していくことになり、これをこの二つの柱の双方に適用する。独自のコンテンツ作成という観点からは、特に宗教文化に関わる教育を充実させるための教材作成に力を入れていく予定である。

一、デジタル・ミュージアムの運営
 平成十九年より運用されているD

Mは、博物館等で利用されているデータ管理ソフト「ミュージズテック」のシステムを用いており、さまざまなデータベース・事典・ライブラリなどをオンラインで総合的・横断的に利用できるものである。現在、公開されているデータベース類は二十八に及ぶ。

本機構の発足以来、各機関の担当者による「デジタル・ミュージアムワーキンググループ」を結成して意見交換と検討を重ね、基本システムの構築とソフトウェアの改善、コンテンツの充実などに注力してきた。

基本的な部分の確立と運用はすでになされているため、今後はアクセスのしやすさ・利用しやすさの改善、ならびに教育活動への活用が課題であり、本プロジェクトの本年度の主要もそこにある。

そのために、DMワーキンググループのメンバーとソフト提供会社の担当者、機構事務課・広報課等との連携を密にしての定期的な会議を開く。そして、システムの改善、効率的

目次

- ◆日本文化研究所 平成二十五年度事業計画①
 デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開 (井上順孝) 1
- ◆日本文化研究所 平成二十五年度事業計画②
 「国学院大学 国学研究プラットフォーム」の構築 (遠藤潤) 3
- ◆学術資料センター 平成二十五年度事業計画①
 考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開 (内川隆志) 4
- ◆学術資料センター 平成二十五年度事業計画②
 近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究 (小川直之) 5
- ◆学術資料センター 平成二十五年度事業計画③
 「文化財研究」拠点の構築 (深澤太郎) 6
- ◆学術資料センター 平成二十五年度事業計画④
 神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析 (加瀬直弥) 7
- ◆校史・学術資産研究センター 平成二十五年度事業計画①
 国学院大学における大学アーカイヴズと自校史教育の構築と展開 (齊藤智朗) 8
- ◆校史・学術資産研究センター 平成二十五年度事業計画②
 国学院大学における学術資産研究の発展と公開 (齊藤智朗) 9
- ◆研究開発推進センター 平成二十五年度事業計画 (宮本誉士) 10
- ◆二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
 地域・渋谷から発信する共存社会の構築 (遠藤潤) 11
- ◆事業計画・人事一覧 12
- ◆彙報 14
- ◆資料紹介 井上氏旧蔵資料「古史成文」 16

な運用のための検討も重ねていく。
 その検討内容としてはまず、データベースの増加に対応し、初学者や外国人利用者が使いやすくなるよう、ポータルサイトの設定ならびに検索画面の改善が優先課題として挙げられる。

次に、各機関の成果や刊行物、DMのサイトにスムーズにアクセスできるようにするため、本機構内各機関のウェブサイトを担当者と連携の上で、本DMワーキンググループの主導で各機関サイト構成の点検と改善を推進する。また、特に本機構サイ

トの構成の再点検と修整を優先して進め、DMや各機関成果の発信・利用の「入口」を整えることに重点を置く。

並行して、DMのコンテンツ拡充に努め、機構内の各機関からのデータベース追加・公開の要請があれば迅速に対応していく。コンテンツ開発としては、特に動画素材の作成と活用がこれからの大きな課題であり、そのためのツールと公開方法について議論を深めていく必要がある。

一つの具体的な方法として、後述

の宗教文化教育の教材開発とも連動させて、スマートフォンアプリの作成・公開体制の構築の可能性を検討していく。

二、プロジェクト独自の研究とデジタル・コンテンツの構築

① 教派神道・神道系新宗教の資料整理とデジタル化、公開の開始

本研究所では、これまで長きにわたり、教派神道（神道教・神道修成派など）と神道系新宗教関係の文書資料を多量に収集してきた。すでにこれらをデジタル化し整理する作業を進めてきており、多くが完了している。

平成二十四年度には、DMのなかに「教派神道関連資料データベース」が構築され、神道教関係の資料のデータ公開が開始されている。

本年度はこのデータベースのコンテンツを充実させるべく、神道教関係資料・神道修成派関係資料・神道系教団資料の順に、データ公開のためのメタデータの整備と資料内容の分析を行い、アップロードを進める。

② 神道・日本文化関係論文の双方向翻訳（日本語文献の外国語訳 ならびに外国語文献の日本語訳）

これまでのプロジェクトでは、毎年三〜四本程度の神道ならびに日本文化に関する論文を選定して双方向で翻訳し、ウェブ上で公開を進めてきた。すなわち日本語論文の外国語訳と、外国語論文の日本語訳である。平成二十四年度においても、英語論文の日本語訳二本、日本語論文の英

訳二本を行った。これまでに双方向で翻訳された論文はすでに二十七本に及ぶ。

本プロジェクトにおいても基本的なこれまでと同様の事業を継続する。近年に刊行・発表された四本程度の論文を毎年選定し、翻訳する。対象言語も英語にかぎらず、他言語との双方向翻訳を検討していく。

なお、平成二十四年度には、DMのなかに「Articles in Translation 双方向論文翻訳」データベースを構築し、これまでに翻訳された論文タイトル閲覧の一覧性を高め、書誌情報を整備するなどの改善がなされた。本年度もデータベースの説明言語の追加など、利用者のアクセスのしやすさに注意を払い改善を加えていく。

③ オンライン神道事典EOS (Encyclopedia of Shinto)の拡充

英文のオンライン神道事典であるEOSは、旧サイトの公開以来、世界中から多くのアクセスがあり、広く世界に知られ利用されているコンテンツとなっている。本プロジェクトにおいても、その内容のチェックと充実・改善をはかっていく基本姿勢は変わらない。

まず、すでにアップロードされている本文の内容をチェックし、改善していく作業については、統一性・整合性を確保するべく引き続き時間をかけて行っていく。

一部の章については、「第八部 流派・教団と人物」（計百十八頁程度）の翻訳・と校閲を完了させ、公開を始め

る。また、すでにアップロード済みの「第四部 神社」についても、内容のチェックと改善を進める。

平成二十四年度には「Appendixes 付録」として「神名索引」「記紀神系譜」「記紀神名対照表」を追加した。本年度はこれまで進めてきた年表（簡易版と詳細版）の翻訳の仕上げと内容チェックを行い、公開を始める。

なお、EOS新サイト公開後も、依然として旧サイトの利用・閲覧者も多いと思われるため、機能と内容の完全引き継ぎを確認した上で、新サイトへの誘導の呼びかけも広く行っていく予定である。

さらに本プロジェクトにおいては、後述する教材作成と教育への活用と密接に連動する形で、EOSならびに「A Beginner's Pictorial Guide: Images of Shinto」の内容を下敷きにして、日本及び国外の学生や神道研究に関心をもつ人々がともに学べるように、日英二言語表示のコンテンツ構築を考えている。

三、教育への活用の重視

従来のDMの運営とコンテンツ構築に加え、本年度からは、DM全体においても、また本プロジェクト独自のコンテンツにおいても、特に重視されるのが、これらのコンテンツに基づいた教材作成と教育への活用である。

すでに平成二十三年十一月以来、三回の認定試験により九十七名の「宗教文化士」が誕生している。学術メディアセンターには、同資格制度の運営を担う「宗教文化教育推進

センター」(CERC, サーク)が設置されており、本研究所ならびに本プロジェクトは協力体制を構築してきた。本年度も六月三十日と十一月十日に認定試験が予定されている。

また、本プロジェクト代表者の井上順孝を研究代表者とする科学研究費基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」は、本年度で三年目となる。

これらのセンターならびに科研と連携し、特に教材開発の面を進めていく。具体的には、前述の神道文化の初学者向けの二言語コンテンツの基盤構築、プロジェクトメンバーの動画作成チームによる動画教材とスマートフォンアプリの作成・収集・整理と公開体制の整備、宗教文化の学習に資する映画・世界遺産・博物館・参考文献などに関するデータベースの拡充などである。また、そのために必要な調査・研究・研究会の開催などを継続的に実施する。

なお、プロジェクト内容と密接に関連するテーマで毎年開催してきた国際研究フォーラムについては、本年度は九月六日に、本学で開催される日本宗教学会第七十二回学術大会の公開講演会との共催で行う予定である。講演の共通テーマは「ネットワークする宗教研究」であり、神話学・進化生物学・神学研究の各専門家により宗教研究の最前線の課題について論じられる。今日の宗教文化教育の方法や教材開発のあり方にとっても、刺激的な視点の提供が期待される。

日本文化研究所 平成二十五年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築

遠藤 潤

一、事業の目的と概要

この研究事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものである。

本研究では、創立以来、神道の基礎的研究、神道・国学関係人物研究、神社史料調査などの活動を継続的に進めてきた。この事業は、これらの成果に立脚しつつ、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまな行われている国学研究の相互交流の場としてのプラットフォームを構築することを目的とし、さらには学外の国学関係研究者との交流の基点たらしめようとするものである。

この事業では、「Ⅰ 国学研究の基礎的データ構築」「Ⅱ 国学に関する研究連携のための組織づくり」を大きな柱として、国学研究に関する基礎情報を共有可能な形態で蓄積する方法を模索するとともに、学内のさまざまな国学研究の間の連携を可能にすることを目指している。

この事業は、平成二十三年度から三年計画で発足し、本年度は最終年度にあたる。日常的な研究活動を遂行するとともに、三年間の事業を総括する内容を予定している。

二、平成二十五年度の研究計画

Ⅰ 国学研究の基礎的データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

平田篤胤の著書『古史伝』版本の研究については、これまで行ってきた精読のための研究会を、平成二十五年度も定期的に行う。精読にあたっては、デジタル撮影を行った國學院大學図書館蔵『古史伝』版本および日本文化研究所蔵『古史伝』版本を底本とし、秋田県公文書館所蔵の『古史伝』草稿本や他機関の所蔵する諸本を適宜参照して、版本の形態になる以前の加筆・訂正などの編集作業にも配慮しつつ読解を進める。研究会の成果については、記録として蓄積し、公開にふさわしい内容については、デジタル形態での本文公開に際して付加できる形になるよう編集を行う。ここで対象としている『古史伝』は段ごとにまとまった内容をもつ構成となっている。平田篤胤の諸著書でも『古史伝』を参照する際に段の形で指示がなされることが多い。日本文化研究所蔵『古史伝』版本については、デジタル化されたデータで段単位で閲覧できる形態へと編成した上で公開を行い、研究者や関心を持つ者への便宜を図りたい。

また、関連する内容として、明治初年にかけての『古事記』や古史に

関わる諸文献の調査を行う。

(2) 国学者の地域拠点の研究

近世の藩と国学者の関係についての研究に関しては、平成二十五年度は薩摩藩などを対象として調査・研究を行う。一方、平成二十四年度までに対象とした加賀藩や紀州藩に関する研究も継続して進める。

薩摩藩については、薩英戦争以後のイギリスと国学者の具体的な関係・交渉に留意しつつ、幕末維新期の神仏分離や廃仏毀釈の動きに関する国学者の実際の関与を再検証するという問題意識や、維新後に新政府の神社行政や神社に関わる諸動向において重要な役割を果たす人物を背景から明らかにするという問題意識のもと、調査・研究を進める。具体的には、まず、すでに活字化された史料を調査・収集して検討し、またこれまでに本学のさまざまな研究プロジェクトや研究事業で収集した史料の存在などを確認した上で、鹿児島県立図書館および鹿児島県歴史資料センター黎明館などに所蔵されている資料については、上記の問題意識に即して調査を行い、藩の神社政策や国学者の位置づけについて考察を進める。

また、過年度に調査・研究を行った対象地域についても、鈴屋および気吹舎の門人組織の調査・把握を引き続き行うとともに、地方におけるそれぞれの一門や学塾の門人の活動についても調査し把握する。

Ⅱ 国学に関する研究連携のための組織づくり

この事業では、これまで数回にわたり国学研究会を開催してきた。平成二十五年度にも、日常的に行っている研究会とは別に、国学研究会を開催する予定である。

三年間の事業の成果をふまえつつ、学内の別の研究事業と連携する形で、近世後期の国学に関するシンポジウムを開催する予定である。

このように、研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築」の平成二十五年度計画では、日常的な研究活動に加えて、事業の総括のためのいくつかの活動を行う。國學院大學における国学研究が相互に連携をもって今後活動していくためのプラットフォーム形成を目指しているが、事業期間終了後の諸研究の連絡のあり方をも視野に収める必要がある。この点については、平成二十五年度の事業を遂行する中で、留意していきたいと考える。



第3回国学研究会 (平成25年2月)

学術資料センター 平成二十五年度事業計画①
考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開
 内川 隆 志

一、事業の目的

大学博物館の主要な使命は、学生に対する「教育参考」、研究者に対する「研究発信」、及び一般に対する「大学開放」に集約される。これらの根幹にあるのは、博物館が所管する一次資料化された学術標本群にほかならない。当事業は、かかる前提に立つて、当センターの所管する学術標本をあらためて一次資料化し、収蔵品の台帳・目録を整備するとともに、その学術的価値を高めるために必要な調査・研究を実施する「学芸研究」機能を確立していくものである。

顧みれば、昭和三(一九二八)年の開館以来、当館が収集してきた学術標本は、約十万点に及び、台帳登録件数も六千件を超えた。しかし、創設から八十年以上を経過するなかで、国・地方自治体・本学関連法人に移管した収蔵品や、管理上の混乱を来した資料も少なからず認められる。そこで、平成二二(二〇〇八)年度より、悉皆的な収蔵品確認を開始した。また、まとまった学術標本の調査・研究はもちろん、経年劣化した資料の修復や、新しい展示コンテンツの開発も併せて実施している。とりわけ、平成二二(二〇一〇)年度までの三ヶ年計画では、縄文時代の大形石棒に焦点を当てたサブプロジェクトを行ってきた。もっとも、主

要業務である収蔵品確認等については、なお時間を要するところであり、平成二三(二〇一一)年度以降も事業を継続し現在に至っている。

二、事業全体の内容

(i) 学術標本の再一次資料化と研究・公開(短期計画)

考古学の専門的な研究はもとより、博物館における学芸活動も、その根本にあるものは一次資料化された学術標本にほかならない。この事業では、膨大な収蔵品の再一次資料化によるデータベース作成と、まとまった標本群の研究事業(サブプロジェクト)を実施する。これは、収蔵品の画像データベースを構築するための前提的作業でもある。

(ii) 『収蔵品台帳』・『資料目録』の整備・公開(中期計画)

(i) によってデータベース化された学術標本情報をもとに、新たに『収蔵品台帳』を編修する。また、そこからまとまった学術標本群の『資料目録』を抽出・公開して、広範な資料の活用供する。

(iii) 劣化資料の修復と新展示技法の開発・公開

(i) によって整理された学術標本のうち、劣化した資料の修復を行うとともに、新しい展示技術や展示コンテンツの開発を行う。

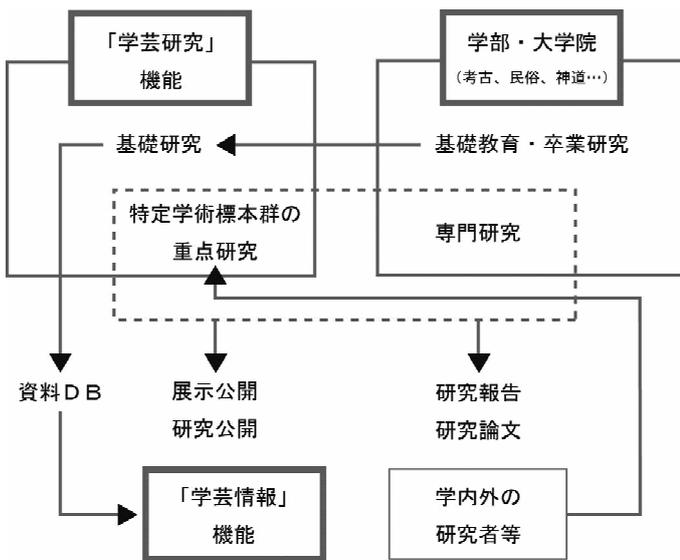
(iv) 大学博物館活動の実践教育
 これらの事業では、学部学生・大学院生等を臨時雇員として任用し、博物館活動の実務を推進する。まさに機構の研究事業と、学部・大学院教育の連携であり、専攻学生の育成に資するものといえる。

三、事業計画

これまでの作業により現行『台帳』の再検証が一段落したため、国・地域・遺跡単位に収蔵品を再配列した仮『目録』を作成し、その『目録』に従って実物資料を収納していくことが可能となった。本年度にはさらに、たまプラーザキャンパス収蔵庫に保管している民具についても、員数確認や清掃を行いつつ、仮『目録』を作成していく。

また、研究上とりわけ価値の高い特定学術標本群について、重点的な調査・研究を実施する。具体的には、先史資料班が長野県須坂市石小屋洞窟遺跡、原史・有史資料班が茨城県常陸鏡塚古墳、福島県白河市建鉢山遺跡等を取り扱う。外国資料班が所管する満洲鞍山中学旧蔵資料の評価にあたっては、国内の関連資料所蔵機関を訪問して資料調査を実施する予定である。

当事業の成果のうち、個別の研究成果については機関誌等にて公開していく。現状では、なお学術標本の一次資料化が充分でなく、新版『目録』を公開する段階に至っていないが、時期を見て、当館所蔵資料の全貌を明らかにしていく予定である。



学術資料センター 平成二十五年度事業計画② 近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究

小川直之

研究目的

本プロジェクトの目的は、本学が所蔵している学術資料のデジタル化とデータベース化を進め、その成果をもとに地域連携のあり方について研究を進めることにある。

國學院大學は、開学以来学内にさまざまな学術資料を集積してきた。ここでいう近代学術資産というのは、そうした学内にある資料群のことで、具体的には学術資料センター所蔵の柴田常恵(一八七七一―一九五四)と宮地直一(一八八六一―一九四九)による資料を対象としている。

これらの資料に関する研究は、今までに、平成十一年度～十七年度に実施した学術フロントティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」、これを引き継いだ「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用と資料化に関する研究」(二十年度～二十二年度)などで行ってきた。二十三年度からの本プロジェクトは、こうした成果を踏まえつつ、未整理のもの資料化を進めるとともに、「地域連携活用」の方法を検討しながら諸資料の社会化をはかることである。

平成二十五年度は、本プロジェクトの最終年度であり、以下のような事業を計画している。

柴田常恵資料

柴田常恵は、明治後半から昭和前期にかけて考古学や文化財保護行政の分野で活躍した人物である。柴田による調査資料は、没後に大場磐雄博士によって國學院大學の所蔵となった。柴田は、とくに我が国の文化財保護行政の確立に大きな役割を果たしており、生前に作成された写真アルバムやガラス乾板は、多くの分野のものが含まれている。すでに本学では写真資料目録Ⅰ・Ⅱ、拓本資料目録を刊行し、写真資料はデジタル・ミュージアムでも公開している。

今次プロジェクトでは、柴田資料の瓦拓本資料二、七六三本のデジタル化、コレクションされた土器・石器類の整理、調査記録(野帳)の整理と記載内容の研究を進めてきた。拓本資料には、瓦の他に板碑、梵鐘、仏塔・石碑、仏具などがあり、これらの目録化は終了している。作業を進めてきた瓦資料のデジタル化を二十五年内に完了させる予定である。

また、氏の調査研究に関しては、八十三冊の野帳が残されている。この野帳はメモ程度の記載で、その意味内容の理解は容易ではないが、二十三年度から読解と実地調査を進めているので、二十五年度もこの作業を続け、今後に引き継げるようにしたい。

デジタル・ミュージアムでの公開を目指す。板碑、梵鐘、仏塔・石碑、仏具などの拓本二、〇八六本のデジタル化作業は未着手のままとし、二十六年度以降の課題としたい。このうち梵鐘については、第二次世界大戦中に失われているものが多くあると思われる。重要な資料と認識している。その実地調査なども二十六年度以降の課題となる。

宮地直一博士収集神社絵葉書資料

宮地直一博士は、内務省官僚として神社考証にかかわるとともに、東京大学、國學院大學において神道研究者として重要な役割を果たした人物である。本学には、宮地博士による天神人形コレクションも寄贈されているが、神社絵葉書は二、三五六集、一万四、五四八点がある。その範囲は、全国にわたるだけでなく海外にも及んでおり、個人による神社絵葉書コレクションとしては、点数・範囲の上で他に類を見ないといえる。

神社絵葉書の目録化は関東地方と海外を残してほぼ終了し、各画像のデジタル化は九州・近畿地方と東北地方が終わっている。このうち沖縄県(那覇市・波上宮)、鹿児島県の分については二十四年度に実地調査を行うことで、発行年次に関する資料や絵葉書化された景観の撮影場所などが判明したものもあり、二十五年にはこうした成果もデータベースに盛り込む。

平成二十五年度は、デジタル化未了の約三、三〇〇点のデジタル化を進めるとともに、地域連携に向けた作業として、東日本大震災で被災し

た東北四県の、宮地コレクション神社絵葉書五七〇点と学術資料センター(神道資料館)所蔵分六二点を合わせた目録の発行を計画している。

二十五年で宮地コレクションのデジタル化を終了することは難しいので、作業の進捗状況をみながら二十六年度以降の作業計画を立てておく予定である。

神社絵葉書にはさまざまな活用の方法が考えられるが、絵葉書研究は平成十四年に日本絵葉書会が結成され、研究例会の開催や会誌『エハガキ』の発行も行われていて、研究が進みつつある。こうした研究も踏まえながら、二十五年には本学所蔵の絵葉書資料の活用について考えていきたい。

また、本プロジェクトでは、絵葉書の発行と普及に関する地域研究を二十三年度から進めており、二十五年にはその成果をまとめる予定である。

成果の公開について

本プロジェクトは、二十三年度～二十五年度の三ヶ年計画であり、二十五年年度には、①柴田常恵による瓦拓本資料の公開、②宮地コレクションと神道資料館所蔵の東北四県の神社絵葉書の写真入り目録の刊行、③研究成果をまとめた『人文科学と画像資料研究』第七集の刊行を計画している。

さらに本プロジェクトの成果として、平成十一年度から進めてきた画像資料研究の成果をもとに、東京都多摩地方で地域連携事業としての公開も計画している。

学術資料センター 平成二十五年度事業計画③ 「文化財研究」拠点の構築

深澤 太郎

一、事業の目的

大学博物館には、その中核的な「学芸研究」機能や、学術標本群等に関する各種情報・データベースを管理し、学内のMLA連携を進めていく「学芸情報」機能(これは当センターの「近代学術資産の資料化と地域連携活用」に関する研究)事業などが分担)の他、外部の研究機関等と連携して具体的な研究活動を広く推進していく「文化財研究」機能も必要である。そこで、本

の構築に取り組んできたが、その後継事業については十分な配慮がなされていなかった。そこで当センターでは、このデータベースの継続整備を中核として、祭祀考古学会等と協力しつつ全国的な祭祀考古学研究ネットワークを構築し、網羅的かつ最新の学術情報にアクセスできる研究・教育拠点を作り上げていく。

プロジェクト

伝統文化リサーチセンターが取り組んできた、有形・無形文化財の学際的調査と研究・教育を可能とする研究基盤を整備していく。テーマの必要性に応じた多様な研究ユニット、すなわち学内・学外研究者(考古学・歴史学・民俗学・地理学・宗教学・環境学など)のハブとしての機能も期待される。

プロジェクト

「埋蔵文化財研究」拠点構築サブプロジェクト
(iii) 「埋蔵文化財研究」拠点構築サブプロジェクトでは、考古学研究室と共同で文化財調査・整理・研究の基盤を構築する。また、外部からの研究事業受託(原則として本学が関与した遺跡の再調査事業等に限定)の受け皿を整備するものである。若手研究者・学生による、実践的文化財研究実習の効果も期待される。

二、事業全体の内容

(i) 「祭祀考古学研究」拠点構築サブプロジェクト
祭祀遺跡データベースについては、伝統文化リサーチセンターがそ

三、事業計画

当事業は、以上三つのサブプロジェクトからなる。勿論、これらの運営にあたっては当センター全体の協力が不可欠であり、他事業からも必要に応じて助言・助力を仰いでいく。

まず、(i)では、伝統文化リサーチセンターが作成した祭祀遺跡データベースを再構築するものであり、具体的な事業としては、関連文献の収集・整理等が主となる。

また、(ii)では、従来本学が取り組んできた伊豆諸島地域の研究に加えて、新たな研究フィールドや研究課題の選定を進めていく。

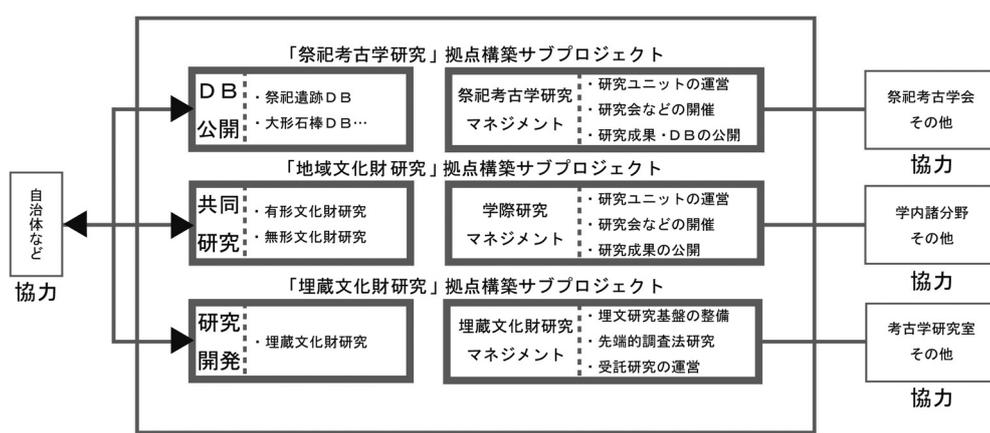
なお、(iii)では、考古学研究室と共同で先端的な埋蔵文化財調査研究体制を組織していく。同時に、外部からの委託事業の受け皿を形成する。具体的事業の詳細は、委託事業の受託協議において決定する。

当事業の成果のうち、個別の研究成果については『紀要』等にて公開していく。祭祀遺跡データベースは、整備され次第、一覧表を伴う形でデジタル・ミュージアムにアップする。埋蔵文化財研究を受託した場合、委託側と協議の上、委託料の範囲内において研究報告書を刊行することとしたい。

四、受託事業

ところで、(iii)に関しては、平成二十四年度に引き続き長野県須坂市からの委託を受け、同市八丁鎧塚古墳出土資料の再整理事業を受託した。この事業については、昭和三十二(一

九五七)年の鎧塚古墳第一次調査を永峯光一元教授が手掛けた経緯や、当センター所管の「大場磐雄資料」に当時の記録が残されている点を鑑み、受託することを決めたものである。これまでに、第一次・二次調査で出土した埴輪の整理が終わっており、本年度は第三次調査出土資料を含めた再検討を進める。また、各種副葬品の調査も順次実施していく予定である。



学術資料センター 平成二十五年度事業計画④
神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析

加瀬直弥

はじめに

ここで紹介する本事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」は、平成二十三年度の事業開始以来、古代の神道祭祀に関する研究を軸としてきた。具体的には、伊勢の神宮(三重県)や九州北部の神社の調査、及び、神道を特色付ける重要な行事である祓に関する調査研究などを計画、実施した。

平成二十五年度は、従来の研究活動を継続発展しつつ、成果を教育に還元することを目指している。具体的には次の二点に重点を置く。

(一) 神社の歴史的役割に関する調査研究

本年度は、祭具などから神道祭祀の淵源を明らかにすることを旨とする。本事業では平成二十四年度に、祓の儀礼で用いられる人形を対象として、飛鳥の石神遺跡・飛鳥池遺跡、及び平城京内裏の発掘調査において出土した銅製人形(いづれも奈良文化財研究所蔵)を調査し、その用途について解明した(概要は『國學院大學神道資料館 館報』〈「館報」〉十三号に掲載)。

しかしながら、祓の人形については、平城京内で出土した多数の木製人形・鉄製人形が注目される。したがって、それらの特質を解明し、先述の銅製人形や、文献史料に見られ

る大祓との関係を確かめなければ、人形の歴史の実像を明らかにしたとはいえない。そこで、本年度は、これらの人形に関する研究を実施する予定である。

さらに、古代神社に関する調査研究を、現在事業に参画している研究者の専門分野に応じて進めていく。この成果は、次に示す方法で公開したり、新たな資料の購入に反映させることとなる。

(二) 神道に関する研究成果の教育等への反映

資料の特色を示しつつ、神道の特質を広く紹介する活動は、本事業を遂行する神道資料館部門(以下「本部門」)に課せられた役割を果たす上で重要な意味を持つ。これまで、展示活動や刊行物の制作を通して、その役割を果たしてきた。

刊行物については、資料からみた神道の諸相を解説した年刊の『館報』や、神道関係資料を類型化し、平易に紹介した『表現される神とまつり』などが、近年の代表的なものである。これらは、具体的な史資料を示しながら、神道史の流れを広く紹介するよう留意して制作している。神道の歴史を明確にして、日本文化の基層でもある神道を、多くの方々へ体得していただくよう、という考えに基づいている。

特に、平成二十二年制作の『館報』十号は、この考えを直接的に反映させて刊行した。当該号は、「史資料で考える神道の歴史」という特集を組み、神道史上の要点を本部門所蔵の関連資料を用いて紹介したが、その制作以来、本学神道文化学部の導入教育で使用するなど、現在に至るまで、教育のために活用している。本事業では、これを発展させた刊行物を作成し、部門としての使命を全うする。

展示活動については、従来遂行してきた、博物館内における、神道資料の常設展示に関する企画立案及びその実施が中心となる。平成二十五年度はこれに加えて、同館の企画展「伊勢の神宮とその周辺」―神のあらわれ(仮題)―の実質的な実施主体となる他、大学所蔵典籍を学外で展示

する「学びへの誘い」の企画立案に携わることとなった。とりわけ「学びへの誘い」は、「祭祀絵巻にみる日本のこころ」と題し、本部門所蔵資料と本学図書館所蔵品により、神社祭礼の象徴でもある行列を紹介する。これは、本事業で進めてきた本学所蔵の神道関係資料の調査の成果を反映させる機会となっている。

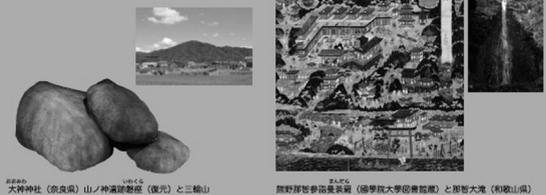
※ ※ ※
 なお、平成二十五年度は、本事業の最終年度に当たる。当該事業をはじめとする本部門の研究・展示面での蓄積を、博物館等他組織の人的・物的資源を活用しつつ、どのように継承活用していくかという点が、目下重要な検討課題となっている。先述した本部門の役割を念頭に置きながら、最善の方策を講じていきたい。

表現される神とまつり

日本各地に神社があります。神社では、「自身や日本全国などに、災いがなく、良いことがあるように」と願う人々が、神に対してまつりをおこないます。人々はまつりにあたり、さまざまなものを形作ってきました。それらは、長い歴史の中で、細部が変化しながらも、その基本は受け継がれています。ここでは、その流れを紹介します。

頭われる神の姿

特色ある自然の地を、神の場と見立てる



大神神社(奈良県) 山ノ神遺跡(飛鳥)と三輪山

熊野那智参詣道長狭段(国学院大学図書館蔵)と那智大滝(和歌山県)

木や石を神の象徴と考える



白馬奉養(国学院大学図書館蔵)

人(僧侶)の姿で神を表現する



男神像・女神像

平野八幡神像

生活の象徴を合わせて表現



おしらさま(該部が儀の杖・養蚕)

凡例: ● 古代の彫像が後世まで受け継がれたもの ● 中世以降広まったもの
 所蔵の彫像のないものは国学院大学神道資料館(研究開発推進機構学術資料部)蔵

『表現される神とまつり』

校史・学術資産研究センター 平成二十五年度事業計画① 國學院大學における大学アーカイヴズと 自校史教育の構築と展開

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、校史資料の収集や保存、また校史の研究を通じて得た成果を機関誌等で公開していくとともに、特に本学における自校史教育の基盤形成のサポートに重点を置くものである。本事業では、学内の関係機関・部署と連携・協働して、本学の自校史教育用の教材の作成や、自校史への理解度及び当該教材に関するアンケートの実施と報告書の作成等を行い、本学の学部教育やFD (Faculty Development) 活動の上で活用していくことを目的とする。

前年度の成果と本年度の計画

I 創立百三十年記念事業

本学では、平成二十四年に創立百三十年を迎えるにあたり、数々の記念事業が実施された。これら記念事業のうち、本センターは、本機構の教員・研究員や大学事務局職員との協働による『國學院大學百三十年記念誌』の編纂、および特別展「有栖川宮家ゆかりの品々」の開催（於伝統文化リサーチセンター資料館、平成二十四年十月二十七日～十二月二十日）に従事した。

II 自校史教育

本センターが作成した新しい自校史教育用サブテキストである『國學院大學の百三十年』（教育開発推進

機構共通教育センター発行）の、教養総合「神道科目」における「國學院大學の歴史」での使用が平成二十四年度より開始された。なお、平成二十一年度以降、神道文化学部や教育開発推進機構共通教育センターの協力で自校史教育用サブテキストに関するアンケートを行ってきたこと

を踏まえ、今回も新訂版に対応したアンケートを関係機関・部署と共同で実施し、平成二十四年度は、計二、四〇八通（前期一、五四二通、後期八六六通）のアンケート用紙を回収して、集計を行った。また、当該テキストのあり方・形態等も関係機関・部署と従前と同様に検討し、平成二十五年度用にサブテキストの改訂を行った。平成二十五年度は、今後の当該テキストのあり方を引き続き検討していくとともに、本事業の最終年度にあたることから、これまで実施してきた当該サブテキストに関するアンケートの集計と、その検討・分析の結果をまとめた報告書を作成する。

III 校史資料の整理保存・展示

校史資料の整理保存や収集、学内外からの自校史に関する問い合わせへの対応を日常的に行った。また、平成二十四年度より、伝統文化リサーチセンター資料館における「國學院の学術資産に見るモノと心」ス

ペースでの展示を通じた研究成果の公開を当該センターから本センターが引き継いだことを受けて、展示パネルの修正や新規作成の作業を実施した。平成二十五年度も校史資料の展示を充実させていく予定である。

神道文化学部の学部創設十周年を特集した『國學院雑誌』第百十三巻第十一号（平成二十四年十一月刊）に、齊藤智朗「神道文化学部略年譜」を各々寄せた。平成二十五年度も本センターの機関誌をはじめ、本事業における研究成果を発表していく。

IV 研究業績

本事業における教員・研究員による研究成果としては、本センターの機関誌である『國學院大學 校史・学術資産研究』第五号（平成二十五年三月刊）に、宮部香織「小中村清矩と法制学講義」、渡邊卓「国民精神作興にみる武田祐吉の立場―昭和十二年、台湾における『万葉集』講義から―」の二本の論文を発表した。また、『國學院大學研究開発推進機構紀要』第五号（平成二十五年三月刊）には、益井邦夫「和歌教育に見る短歌結社の一考察」の論文を、加えて

V 『校史』

本学の歴史や所縁のある人物にまつわる記事等をまとめたパンフレット『校史』第二十三号（平成二十五年三月刊）を編集・刊行し、本学創立百三十年式典や前述の特別展「有栖川宮家ゆかりの品々」の模様のほか、宮部香織「池辺義象の「日本制度通」講義」、渡邊卓「武田祐吉自筆原稿の検討」、齊藤智朗「高山昇翁頌徳碑について」の各小論を発表した。平成二十五年度も第二十四号を刊行する予定である。



『國學院大學130周年記念誌』（上）
『校史』第23号（下）

校史・学術資産研究センター 平成二十五年度事業計画② 國學院大學における学術資産研究の発展と公開

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、本学図書館(以下、図書館)と協働して、図書館所蔵の貴重書をはじめとする学術資産を研究し、その成果を図書館のウェブサイト上におけるデジタルライブラリーで公開した、平成二十年度から二十二年度にかけての「國學院大學の学術資産の研究と公開」事業を継続するとともに、貴重書等に関する目録の編纂を行うものである。また本学の学部教員で構成される本センターの兼任教員による、研究員およびアルバイトの大学院生等への指導を通じて、本機構が取り組むべき課題の一つである若手研究者の育成を強化することも目指す。

前年度の成果と本年度の計画

本事業では、具体的に、二つの作業を行う。まず一つは既存のデジタルライブラリーに掲載されている資料に解説を付す「補充」および学術的な価値の高い資料をデジタルライブラリーへ新たに掲載する「追加」の作業であり、もう一つは図書館所蔵の貴重書等に関する目録の編纂作業である。

I デジタルライブラリー解説作成

平成二十四年度は、主に日本文学関連の典籍・資料の充実を図り、本学文学部兼任講師や日本文学専攻の

大学院生の助力・協力も得て、「補充」作業が八点、「追加」作業が十二点の、計二十点の資料に関する解説等を公開した(別表参照)。平成二十五年度も、デジタルライブラリー掲載の典籍・資料の「補充」とともに、図書館が新たに購入した貴重書等を中心に「追加」の作業を引き続き行っていく。

II 貴重書等に関する目録の編纂

貴重書等に関する目録の編纂については、日本文学関係として中世散文学解題目録と、日本史学関係として中近世史書書誌目録の作成作業を進めており、前者に関しては、採



『國學院大學 校史・学術資産研究』第5号

録する典籍のうちの大半の調査・撮影を終了し、平成二十五年度に刊行する予定である。なお、後者については、調査対象を貴重書だけでなく、準貴重書等にまで拡大して、採録内容のより一層の充実を図るべく、平成二十六年度の刊行へと変更した。

III 研究業績

本学の学術資産に関する研究成果として、本センターの機関誌である『國學院大學 校史・学術資産研究』第五号(平成二十五年三月刊)に、針本正行「國學院大學図書館所蔵『ひいな篇』の解題と翻刻」、松尾葦江・伊藤悦子「國學院大學図書館蔵『堀川夜討絵巻』の特徴について」、山本岳史「國學院大學図書館所蔵奈良絵

本『平家物語』考」、伊藤慎吾「國學院大學所蔵『徒然草』関連資料解題」、島山大二郎「國學院大學図書館蔵室町時代後期写『金葉和歌集』の解題と翻刻」、堀越祐一「國學院大學図書館所蔵の毛利氏関係文書」、金子拓・遠藤珠紀「國學院大學図書館所蔵『舜旧記』紙背文書」、高見澤美紀「國學院大學図書館所蔵 安房国長狭郡北風原村牧士永井家文書「支配向並牧士其外姓名録」—解題・翻刻と文書目録—」の八本の論文ないし資料翻刻・紹介を発表した。平成二十五年度も、本事業の作業を通じて得た新たな知見を、本センターの機関誌等で発表していく。

【補充】

	カテゴリー	書名	図書番号
1	5. その他の勅撰集類	続後撰和歌集 伝冷泉 為相筆	貴783—784
2	5. その他の勅撰集類	続千載抄	貴3994
3	7. 歌学書・言語関係	古葉略類聚抄	貴1912—1913
4	8. 上代文学関係	萬葉集 八雲軒本	貴2893—2915
5	8. 上代文学関係	萬葉集 寛永版本	武田文庫 911.12/91
6	17. 古文書・古筆切関係	定家卿記録切	貴1910
7	17. 古文書・古筆切関係	家隆卿四半切	貴1911
8	17. 古文書・古筆切関係	古筆切 八種	貴1919

【追加】

	カテゴリー	書名	図書番号
1	2. 奈良絵本・絵巻物関係	張良絵巻	貴1739—1740
2	2. 奈良絵本・絵巻物関係	呉越絵	貴2367—2369
3	2. 奈良絵本・絵巻物関係	平家公達草紙絵巻	貴4223
4	2. 奈良絵本・絵巻物関係	百鬼夜行絵巻	貴4242
5	2. 奈良絵本・絵巻物関係	堀川夜討絵巻	貴4252
6	10. 平家物語	平家物語 元禄12年版	913.45/H51 (日本文学)
7	12. 史学・法制関係	秤の本地 A本	貴2755
8	12. 史学・法制関係	秤の本地 B本	貴3153
9	17. 古文書・古筆切関係	小早川隆景書状	貴1697
10	17. 古文書・古筆切関係	毛利秀元書状	貴1698
11	17. 古文書・古筆切関係	毛利秀就書状	貴1702
12	17. 古文書・古筆切関係	毛利秀就直書	貴1705

平成二十四年度デジタルライブラリー解説
補充分・追加分一覧

研究開発推進センター 平成二十五年度事業計画 研究開発推進センター研究事業

宮本 誉士

事業の目的

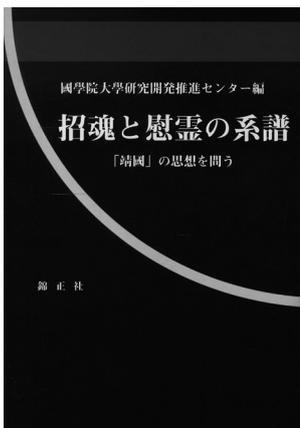
研究開発推進センターは、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会によって策定される研究教育事業を推進し、その成果をもって社会貢献を果たすことを目的としている。

本センターが実施する「研究開発推進センター研究事業」は、二十一世紀研究教育計画委員会策定による二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、建学の精神である神道・日本文化の研究をさらに発展させることを目的として、以下の各項目について進めるものである。

- (ア) 神道・日本文化に関する研究について、近代・現代の研究状況を検討し、学内学術資産などを活用しつつ推進する。
- (イ) 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業の研究マネジメントを行い、関係研究者と連携しつつ、円滑な事業運営を図る。
- (ウ) 神社界等からの外部資金の導入によって、研究プロジェクトを企画し実施する。
- (エ) 国内外の神道及びその関連領域の研究者・研究機関との連携関係を強化する。

事業の特色

本事業の学術的な特色は、これまで本学で培ってきた国学的研究、すなわち精緻な文献等資料の考証に裏打ちされた総合的日本文化学を指すところにある。具体的には、本センターがこれまで実施してきた、学内所蔵の神道関連資料を中核とした神社研究、神仏関係研究、国学関連人物データベース、「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」(平成二十四年度にこれまでの研究成果を集約した三冊目の論集『招魂と慰霊の系譜―「靖國」の思想を問う』(錦正社、平成二十五年三月)を刊行した。写真参照)、などの成果を踏まえながら、学内に集積されてきた学術資産や研究情報の活用・公開をより効果的に進めるための体制を整備するとともに、研究事業成果の発信を行う。



『招魂と慰霊の系譜
―「靖國」の思想を問う―』

平成二十五年度研究事業計画
本年度は、先述した(ア)～(エ)の目的を達成するため、以下の研究活動を実施する。

(1) 「昭和前期における神道・国学と社会」についての研究

当該テーマに関わる学内外の文献資料を調査蒐集し、それらを用いて個々の具体例を精査・分析して、昭和前期における神道・国学と社会の関係を考究し、同時代の神道史・国学史の再検討なども含めた研究活動を実施する。

(2) 神道・国学に関する学内資料の調査研究

近世・近代の国学に関する人物の基礎的データを集積して一般公開している国学関連人物データベースの訂正・補足作業を実施し、併せて活用の利便性を促進する。また、学内諸機関が所蔵する神道・国学に関する資料を把握して、調査・研究を行う。

(3) 北海道神宮の研究

北海道神宮の指定寄附金により、平成二十四年度から、本センター専任教員がマネジメントして推進している本研究の目的は、平成二十六年刊行予定の『北海道神宮論叢(仮)』を執筆・編集することにある。現在所収予定の論考として、「北海道神宮における明治天皇御増祀の歴史的経緯」、「都市・札幌と北海道神宮」等がある。平成二十五年度は、北海道神宮・北海道立図書館・北海道文

書館等の所蔵資料調査、研究開発推進センター研究会における研究成果報告、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』等における成果発表を実施する。

(4) 神道・日本文化研究の国際比較

と国内外の研究者間の連携強化
平成二十五年度より大東敬明・研究開発推進機構助教をハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所に客員研究員として派遣し、在外研究を実施する。また、神社界および国内の関連研究機関との研究交流を推進する。

(5) 研究開発推進センター研究会

本事業に関わる研究報告、本センターにおける日常的成果をふまえた研究報告などを中心とする研究会を定期的に開催し、本センターの構成員を核として、研究開発推進機構構成員や学部教員、客員教授・共同研究員として参画する関連研究者、さらに関心をもつ研究者一般の参加を募りながら議論を行う。

(6) 『研究開発推進センター研究紀要』の刊行

本センターの研究成果を発表するため、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第八号を刊行する。

研究開発推進センター 平成二十五年度事業計画 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業

地域・渋谷から発信する共存社会の構築

遠藤 潤

事業の目的

この研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」は、國學院大學二十一世紀研究教育計画に基づき、建学の精神を具現化するために、研究教育計画委員会によって全学的な研究事業として企画されたものであり、日本あるいは世界のいくつかの社会のあり方およびグローバル化・一体化する世界を再検討することによって、人々がともに生きることができる「共存社会」を構想し、一般社会に対して提言するものである。

この事業では、平成二十三年度までの「共存学」「渋谷学」の二つの事業の成果を継承しつつ、「共存社会の構築」という大きな目標に向けて発展させるものであり、平成二十四年度から三ヶ年の計画を進めており、本年度はその二年目にあたる。

研究事業全体の計画

「共存」に関わる現象は、さまざまなレベルの社会、あるいは局面において観察されるが、本事業では、I 渋谷、II 農山漁村、III 日本、IV グローバル化する世界という四つの領域を対象として設定している。

I 渋谷：渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実についての研究

II 地域(農山漁村)：地域社会の共同性・拠点・持続可能性に関する研究

III 日本：日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界の研究

IV グローバル化する世界：地球規模での共存社会の可能性についての研究

各領域において、人間と人間の関係、人間と環境の関係、歴史・伝統と現代の関係、都市と地域の関係などに注目し、具体的な地域を対象とした調査(フィールドワーク、史料調査、文献調査など)を基礎として、協調、共生、共存、葛藤、対立といった、諸関係の持つ多様な性質を把握する。こうした事例研究の積み重ねとともに、その集約、および多角的な検証を通じて、今後実現と持続の可能な共存関係について学際的に検討し、考えられる共存社会のモデルを構築しようとするものである。

平成二十五年度研究事業計画

この研究事業における平成二十五年度の活動については、全体としては、これまで同様、各領域における研究活動を遂行するとともに、領域横断的な問題意識に基づき「共存社会の構築」に向けた新しいディシプリンを模索する。

平成二十五年度は、全体の計画のなかでは、本学の特長に立脚した社会貢献への具体的見通しを立てる段階である。また、研究事業を通じて、自らの専門分野に軸足を置きつつ、より幅広い学際的視野を持つ若手研究者の育成を図る。
各領域の研究調査計画については以下の通りである。

I 渋谷

Iでは、「江戸・東京」に関する現在の研究水準を踏まえながら、これまでの「渋谷学」の成果を基礎として、渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実について「共存社会」の観点から研究を行う。この領域については、都市形成史、都市民俗、宗教学・神道学、経済とまちづくりのそれぞれの視点を中心として、関連諸学の成果も踏まえながら、「渋谷」の総合的理解を目指し、なかでも、商店街をめぐる都市形成史、また経済とまちづくりの観点からの総合的研究、都市民俗について重点を置く。

また、渋谷地区以外への出張調査としては、松濤地区の旧鍋島藩邸に關して、佐賀県における関係資料調査を行う予定である。

成果公開としては、平成二十三年度開催のシンポジウムに基づく『渋谷学ブックレット』および『都市民俗研究』などを編集・刊行する予定である。

II 地域(農山漁村)

IIは、日本国内の地域(農山漁村)

における共同性に注目し、民俗・宗教と地域コミュニティ、環境、町おこし、持続可能性等の観点から研究を進めている。平成二十五年度は、平成二十三年度から継続して調査を実施している岩手県(一関市・大槌町など)の被災地復興の実際について、神社・祭礼・コミュニティなどに着目した出張調査を行う。

III 日本

IIIは、これまでの本学における神道・日本研究の蓄積に立脚し、日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界を問うものである。

IV グローバル化する世界

IVは、グローバル化する世界を対象に、地球規模での共存社会の可能性を探っていくものである。

それぞれの領域について、内部研究会、公開研究会等で議論を深め、あるべき共存の姿を模索するのみならず、領域II・III・IVを兼ねての成果公開のため、平成二十五年度は、平成二十四年三月に刊行した『共存学―文化社会の多様性』に続く二冊目の成果論集『共存学叢書二(仮題)』を刊行する予定である。

平成25年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

平成25年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開 (◎ H25 - H27)	平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 鈴木聡子	* 井上順孝 斉藤こずゑ ヘイヴンズ, ノルマン 黒崎浩行	市川 収 フレレ, チャールズ	李 和珍 加藤久子	天田顕徳	ナカイ, ケイト 土屋 博 星野英紀 山中 弘	ガイタニデイス, ヤニス キロス, イグナシオ 市田雅崇 今井信治 小堀馨子 野口生也 村上 晶 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築 (H23 - H25)		* 遠藤 潤 松本久史		小林威朗 三ツ松誠	武田幸也	林 淳	一戸 涉 小田真裕
学術資料センター	考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開 (H23 - H25)	内川隆志 深澤太郎	* 吉田恵二 青木 豊 小川直之 笹生 衛 谷口康浩 中村耕作					阿部昭典 阿部常樹 伊藤博司 粕谷 崇 加藤元康 大工原豊 俵 寛司 中村 大 大村松洋介
	近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究 (H23 - H25)	内川隆志 深澤太郎	* 小川直之 黒崎浩行 中村耕作		齋藤しおり	朝倉一貴 黒田迪子		石川岳彦 新原佑典 田中秀典
	「文化財研究」拠点の構築 (◎ H25)	内川隆志 深澤太郎	* 吉田恵二 小川直之 笹生 衛 谷口康浩 中村耕作		石井 匠			栗木 崇
	神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析 (H23 - H25)		* 笹生 衛 岡田莊司 加瀬直弥		吉永博彰		山本信吉	
校史・学術資産研究センター	國學院大學における大学アーカイブズと自校史教育の構築と展開 (H23 - H25)	齊藤智朗	* 阪本是丸	宮部香織		武田幸也	益井邦夫	
	國學院大學における学術資産研究の発展と公開 (H23 - H25)	齊藤智朗	* 阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江	高見澤美紀 堀越祐一	笹川 勲 山本岳史			遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター		齊藤智朗 宮本誉士 大東敬明 伊藤慎二 上西 亘 渡邊 卓	* 阪本是丸 武田秀章 針本正行 遠藤 潤 太田直之 加瀬直弥 菅 浩二 中山 郁 藤田大誠 藤本頼生				赤澤史朗	今泉宜子 坂井久能 佐藤一伯 大丸真美 津田 勉 中野裕三 森 悟朗
	地域・渋谷から発信する共存社会の構築 (H24 - H26)	宮本誉士	* 阪本是丸 上山和雄 古沢広祐 遠藤 潤 菅 浩二 藤田大誠 松本久史 藤本頼生	赤澤加奈子	高久 舞 筒井 裕			木村秀史 康 成文 重村光輝 手塚雄太 西俣先子 野中規正 冬月 律

学芸員（専任） 加藤里美

学芸員（嘱託） 石井 匠 加藤 渉 久保田健太郎 齋藤しおり 高野裕基

◎ 新規研究事業 * 研究事業代表者

平成25年度 研究開発推進機構 人事一覽

平成25年6月1日現在

機構長	井上 順孝
日本文化研究所長	井上 順孝
学術資料センター長	吉田 恵二
校史・学術資産研究センター長	阪本 是丸
研究開発推進センター長	阪本 是丸
校史・学術資産研究センター長代行	針本 正行
研究開発推進センター長代行	針本 正行
國學院大學博物館長	吉田 恵二
教授(兼担)	青木 豊 井上 順孝 上山 和雄 岡田 莊司 小川 直之 齊藤 こずゑ 阪本 是丸 笹生 衛 武田 秀章 谷口 康浩 千々和 到 根岸 茂夫 針本 正行 古沢 広祐 松尾 葦江 吉田 恵二
准教授(専任)	内川 隆志 齊藤 智朗 平藤 喜久子 星野 靖二 宮本 誉士
准教授(兼担)	遠藤 潤 太田 直之 加瀬 直弥 黒崎 浩行 菅 浩二 中山 郁 藤田 大誠 ヘイヴンズ, ノルマン 松本 久史
講師(兼担)	藤本 頼生
助教(専任)	大東 敬明 塚田 穂高 深澤 太郎
助教(特任)	伊藤 慎二 上西 亘 鈴木 聡子 渡邊 卓
助手(兼担)	中村 耕作
客員研究員	赤澤 加奈子 市川 収 高見澤 美紀 フレーレ, チャールズ 堀越 祐一 宮部 香織
ポスドク研究員	李 和珍 石井 匠 加藤 久子 小林 威朗 齋藤 しおり 笹川 勲 高久 舞 筒井 裕 三ツ松 誠 山本 岳史 吉永 博彰
研究補助員	朝倉 一貴 天田 顕徳 黒田 迪子 武田 幸也
学芸員(専任)	加藤 里美
学芸員(嘱託)	石井 匠 加藤 渉 久保田 健太郎 齋藤 しおり 高野 裕基
客員教授	赤澤 史朗 土屋 博 ナカイ, ケイト 林 淳 星野 英紀 益井 邦夫 山中 弘 山本 信吉
共同研究員	阿部 昭典 阿部 常樹 石川 岳彦 市田 雅崇 一戸 渉 伊藤 博司 今井 信治 今泉 宜子 遠藤 珠紀 小田 真裕 ガイタニデイス, ヤニス 粕谷 崇 加藤 元康 金子 拓 木村 秀史 キロス, イグナシオ 栗木 崇 康 成文 小堀 馨子 坂井 久能 佐藤 一伯 重村 光輝 新原 佑典 大工原 豊 大丸 真美 田中 秀典 俵 寛司 津田 勉 手塚 雄太 中野 裕三 中村 大 西俣 先子 野口 生也 野中 規正 冬月 律 村上 晶 村松 洋介 森 悟朗 山梨 有希子

【事務局】

学術メディアセンター事務部次長 (研究開発推進機構事務、情報システム担当)	及川 聡
学術メディアセンター事務部次長 (図書館事務担当)	古山 悟由
学術メディアセンター事務部情報システム課長	堀内 弘行
図書館事務課長	澤井 隆
研究開発推進機構事務課長	杉本 久男
研究開発推進機構事務課	安西 晴美 小倉 健 小平 浩衣 須田 佳代 織田 泰輔 志水 志保 神山 幸子

彙報

会議

○全体

- ・平成二十四年度第五回人事委員会、平成二十五年二月十三日(水)(持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第四回教員等資格審査委員会、平成二十五年二月十四日(木)(持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第五回運営委員会、平成二十五年二月二十日(水)(持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第六回企画委員会、平成二十五年三月十三日(水) 十一時三分～十一時五十分、AMC五階会議室○六
- ・平成二十四年度第六回人事委員会、平成二十五年三月二十一日(木)(持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第五回教員等資格審査委員会、平成二十五年三月二十一日(木)(持ち回り稟議)
- ・平成二十四年度第六回運営委員会、平成二十五年三月二十二日(金)(持ち回り稟議)
- ・平成二十五年年度全員連絡会、平成二十五年四月六日(土) 十七時～十七時三十分、AMC一階常磐松ホール
- ・平成二十五年年度第一回企画委員会、

- 平成二十五年四月十七日(水) 十一時～十一時三十分、AMC五階会議室○六
- ・平成二十五年年度第一回人事委員会、平成二十五年四月二十四日(水)(持ち回り稟議)
- ・平成二十五年年度第一回運営委員会、平成二十五年五月九日(木) 十六時五分～十六時四十分、若木タワー四階会議室○五
- 日本文化研究所
- ・平成二十五年年度第一回所員会議、平成二十五年四月六日(土) 十一時十分～十一時四十分、AMC五階会議室○六

- 学術資料センター
- ・平成二十五年年度第一回学術資料センター会議、平成二十五年四月十二日(金) 十七時五分～十七時三十五分



平成25年度 全員連絡会

分、AMC五階会議室○六

- 校史・学術資産研究センター
- ・平成二十五年年度第一回校史・学術資産研究センター会議、平成二十五年四月二十四日(水)(持ち回り稟議)

- 研究開発推進センター
- ・平成二十四年度第四回研究開発推進センター会議、平成二十五年三月十二日(火) 十四時～十五時十五分、AMC五階プロジェクトルーム二

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

- 校史・学術資産研究センター
- ・平成二十四年度教育開発シンポジウム「私立大学における学士課程教育と教養教育のこれから」(共催)、平成二十五年二月十六日(土) 十三時～十七時、AMC一階常磐松ホール、報告者・パネリスト〓長谷川岳史(龍谷大学)、柴崎和夫(國學院大學)、圓月勝博(同志社大学)、コメントーター〓川島啓二(国立教育政策研究所)、鳥居泰彦(学校法人國學院大學理事)、司会〓加藤季夫(國學院大學)、主催〓國學院大學教育開発推進機構

○研究開発推進センター

- ・協定に基づく研究協力に係るワークショップ「国学院大学における日本宗教学研究の最先端」、平成二十五年一月二十三日(水) 〓Porte Room (S250), Second Level, CGIS South

DrGs、発表者〓黒崎浩行(國學院大學)、菅浩二(國學院大學)、星野靖二(國學院大學)、大東敬明(國學院大學)、共催〓ハーバード大学ライシャワー日本研究所

- ・共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり〓岩手三陸・大槌の取り組みから〓」、平成二十五年二月十七日(日) 十時～十七時四十五分、AMC一階常磐松ホール、第一部〓基調講演〓小島美子(国立歴史民俗博物館)、佐々木健(岩手県大槌町役場)、司会〓茂木栄(國學院大學)、第二部〓個別報告〓十王館勲(大槌稲荷神社禰宜)、佐藤一伯(御嶽神明社禰宜)、吉田律子(真宗大谷派僧侶、サンガ岩手代表)、小野仁志(特定非営利活動法人レスバイトハウス・ハンズ)、コメントーター〓板井正斉(皇學館大学)、司会〓黒崎浩行(國學院大學)、古沢広祐(國學院大學)

出張

- 日本文化研究所
- ・井上順孝、「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」の調査のため、平成二十五年二月十七日(日)～二月二十二日(金)、ベトナム、ホーチミン市・タイニン省
- ・松本久史・小林威朗・武田幸也・三ツ松誠、「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築」の調査のため、平成二十五年三月十七日(日)～三月十九日(火)、京都府総

合資料館(京都市)・向日市文化資料館(京都府向日市)

○学術資料センター(旧学術資料館)

・齋藤しおり、「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」の調査のため、平成二十五年二月二十二日(金)～二月二十五日(月)、広島県広島市・廿日市市

・齋藤しおり、「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」の調査のため、平成二十五年三月一日(金)～三月三日(日)、鹿児島県指宿市

・田中秀典、「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」の調査のため、平成二十五年三月二日(土)～三月三日(日)、福岡県筑紫野市

・内川隆志・深澤太郎・石井匠、「伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究」の調査のため、平成二十五年三月十四日(木)～三月十七日(日)、東京都大島町

・小川直之・齋藤しおり、「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」の調査のため、平成二十五年三月十七日(日)～三月十八日(月)(小川)・平成二十五年三月十七日(日)～三月十九日(火)(齋藤)、沖縄県那覇市

・中村耕作・日野正祥、「『文化財研究』拠点の構築」の調査のため、平成二十五年四月十一日(木)、青森県八戸市

○研究開発推進センター

・菅浩二・黒崎浩行・大東敬明、「ハ

ード大学ライシャワー日本研究所との研究交流フォーラムへの参加」のため、平成二十五年一月二十二日(火)～一月二十八日(月)、ハーバード大学ライシャワー日本研究所(アメリカ合衆国マサチューセッツ州ケンブリッジ市)

・中野裕三・大東敬明、「研究開発推進センター事業」に係る札幌まつり関連資料調査のため、平成二十五年二月二十日(水)～二月二十一日(木)、北海道立図書館(北海道江別市)

・菅浩二・宮本誉士・渡邊卓・上西亘、「研究開発推進センター事業」に係る北海道神宮に関する資料調査のため、平成二十五年二月二十五日(月)～二月二十七日(水)、北海道神宮(北海道札幌市)

・古沢広祐・ノルマン・ヘイヴンズ・筒井裕・高久舞・冬月律・西俣先子、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」の調査のため、平成二十五年三月十六日(土)～三月十八日(月)、都南文化会館・岩手県立博物館他(岩手県盛岡市)

刊行物

○全体

・國學院大學研究開発推進機構発行『國學院大學研究開発推進機構紀要』第五号(平成二十五年三月三十一日発行)

○学術資料センター(旧学術資料館)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(神道資料館部門)発行『表現される神とまつり』(平成二十五年二月二十二日発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(神道資料館部門)発行『國學院大學神道資料館館報』第十三号(平成二十五年二月二十八日発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(考古学資料館部門)発行『高々の聖地』(平成二十五年二月二十八日発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(考古学資料館部門)発行『國學院大學学術資料館 考古学資料館紀要』第二十九輯(平成二十五年三月三十一日発行)

○校史・学術資産研究センター

・國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター編『國學院大學 校史・学術資産研究』第五号(平成二十五年三月四日発行)

・國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター編『校史』第二十三号(平成二十五年三月四日発行)

○研究開発推進センター

・國學院大學研究開発推進センター都市民俗学研究会編『都市民俗研究』第十八号(平成二十五年二月二十八日発行)

・國學院大學研究開発推進センター・洪谷学研究会編『洪谷学叢書三 洪谷の神々』(平成二十五年二月二十八日発行)

・國學院大學研究開発推進センター

洪谷学研究会編『洪谷聞きがたり』小倉基が語る東京と渋谷―元都議会議長・前渋谷区長のオーラルヒストリー―(平成二十五年二月二十八日発行)

・國學院大學研究開発推進センター編『招魂と慰霊の系譜―「靖國」の思想を問う―』(錦正社、平成二十五年三月二日発行)

・國學院大學研究開発推進センター編『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第七号(平成二十五年三月十日発行)

資料紹介 井上氏旧蔵資料『古史成文』

ここに紹介する資料は、吉岡蔵書(吉岡徳明)の印が捺された平田篤胤『古史成文』の写本で、井上氏旧蔵資料に収められている。井上氏旧蔵資料は、平成十九年四月に井上頼輝氏より、國學院大學図書館に寄贈された資料群で、皇典講究所の創立

に關わつた平田派国学者、井上頼園と、その子・孫である頼文、頼寿、三代の資料である。内容としては、頼園の書簡類、頼文の伊勢神宮及び考古資料、頼寿の調査ノート・メモ等や、井上家の蔵書などが含まれており、現在、國學院大學研究開発推

進機構校史・學術資産研究センターにて調査・研究・整理を進めている。蔵書印の主、吉岡徳明(文政十二年/明治三十一年)は、江戸出身で、明治以前は天台宗の僧侶だったが、国学を尾高高雅に学び、平田篤胤の著書に接して国学を志した。維新後は、神仏判然令に伴い、復飾。明治六年には、大教院編輯係となり、籠神社、中山神社、沼名前神社等で奉仕。明治十五年以後は、修史館や、内務省社寺局に関わり、六十九歳で歿した。著作には、本居宣長の『古

事記伝』を節略した註釈書『古事記伝略』や、『開化本論』等、多数ある。書誌は、縦二十六・六糶、横十八・〇糶、九十五丁、版心には、「雲半屋藏」とある。写本の本文には、行間への書き込みや、頭註が多く付されており、袋綴の中にも、註釈を記した草稿類が挿入されている。本文にある書き込み・頭註・挿入された草稿には、主に平田篤胤『古史成文』の説が記載されており、他に本居宣長『古事記伝』の説や、「徳明云」と記し、自説を述べた箇所も散見される。以上から、本資料が、徳明の古典研究の一環として著されたものであることは間違いない。

本資料には、その成立を窺わせるような奥書はなく、井上家の蔵書に収められた経緯も不明である。ただ、『国学者伝記集成』(第二卷)「吉岡徳明」の記事は、井上頼園の談話を基にしており、徳明歿後の吉岡家は、頼園の二男頼教が養子となって後を嗣いでいる。このことから、徳明と頼園には、かなり深い交流があつたと推測され、本資料が、井上家の蔵書に収められた所以もこのあたりにあると考えられる。

なお、皇學館大学附属図書館には、吉岡徳明の自筆資料『古事記伝抄』や、自筆稿本『古事記伝略』が所蔵されており、他にも、複数の平田篤胤の著作を写した抜書一冊等がある。本資料を含め、比較検討することによって、より一層徳明の学問・思想を明らかにすることが可能となる。

(武田幸也)

